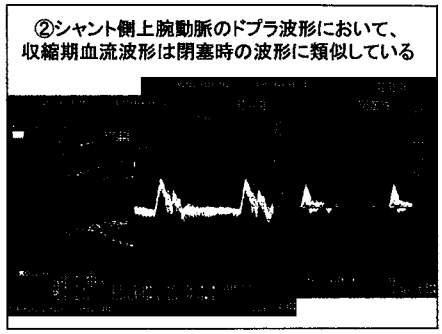
PP-0433 シャント圧迫(閉塞シミュレーション)による動脈ドプラ波形とその血流解析について

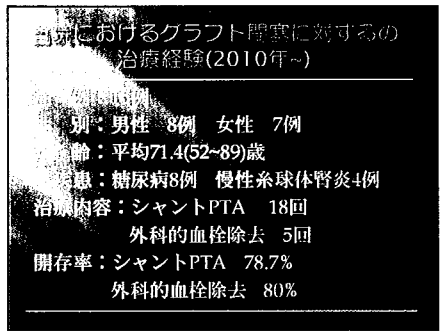
むつ総合病院泌尿器科[1)]，弘前大学医学部泌尿器科[2)]
吉川　和暁[1)]，杉山　尚樹[1)]，山本　勇人[2)]



上腕動脈パルスドプラ法によるシャント血流測定は現在広く行われているが、シャント以外の前腕の血流供給を含めた血流量の算出であり、純粋なシャント血流量ではない。そこでシャント血流量のみを算出する方法として、シャント閉塞前後で比較検討してみた。また、ドプラ波形にnotch（切痕）が記録されることがあり、従来はその意味がシャント狭窄の一形態であると考えられていた。しかしシャントを閉塞してもnotchが残るという現象は、シャント狭窄では説明できなかった。今回はその波形の解析も試みた。対象は当科の血液透析患者180名(2005.11月～2011.9月)とし、シャント閉塞シミュレーションの前後で上腕動脈ドプラ波形と血流量の差を比較した。
結果、拡張期血流量こそがシャント血流を反映していた。また、notchは逆流成分であることが示唆された。

PP-0434 当院におけるグラフト閉塞に対するの治療経験

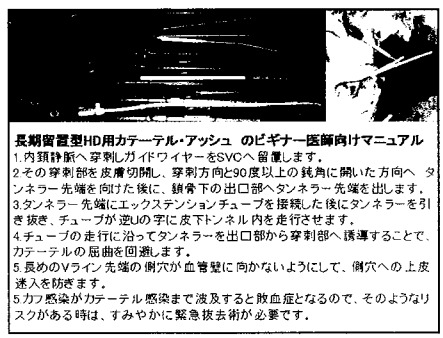
大阪暁明館病院泌尿器科[1)]，河内総合病院泌尿器科[2)]，奈良県立医科大学泌尿器科[3)]
後藤　大輔[1)]，壬生　寿一[1)]，谷　善啓[1)]，坂　宗久[1)]，川上　隆[2)]，中井　靖[3)]，
米田　龍生[3)]，吉田　克法[3)]，平尾　佳彦[3)]



【はじめに】今回、当院において2010年からグラフト閉塞15症例に対して施行した治療方法について検討した。【対象】症例は15例で、男性8例・女性7例、原疾患は糖尿病8例であった。年齢は平均71.4歳、【結果】15例中14例に対して18回シャントPTAを施行、うち血栓溶解術を8回併用した。3例に複数回シャントPTAを施行した(3回：2例、2回：1例)。5例に血栓を外科的手術にて除去した。シャントPTA開存率は78.7%で、外科的開存率は80%であった。【考察・結語】日本透析医会のガイドラインではAVGの二次開存率は術後1年80%、3年60%、5年40%を達成目標としている。今回、目標到達基準に達していると考えられる。人工血管使用例はシャント作製困難症例であり、定期的なMRAや3D-CT等のVA機能のモニタリングを十分に行いながら早期のPTAを考慮する必要がある。

PP-0435 長期留置型HD用カテーテル・アッシュのピットフォール

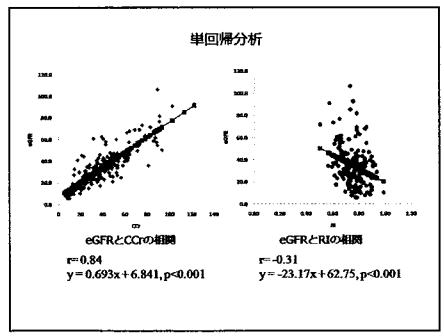
米沢市立病院泌尿器科
白岩　学，高岩　正至



長期留置型HD用カテーテル　アッシュ以後アッシュカテは、通常の緊急用HDカテーテルよりも、カフが付くいているのでカテーテル感染ならびに自然抜去リスクが低く、内腔が大きめで高血流が得られ易い。一方、留置時に鎖骨下の出口部から内頚静脈の刺入部まで逆Uの字に皮下トンネルを造設する必要があり、描く弧が小さいと屈曲し低血流となる。さらにカフ感染からカテーテル感染まで波及すると敗血症となるので緊急抜去術の必要がある。また血管内皮に被われ血流が低血流となり、更にサイドホールへの血管内皮の迷入により抜去困難となるなどのリスクもある。70例/10年の経験をもとに、患者にも医師にも有用な取扱説明書を作製した。

PP-0436 eGFRと実測CCr値およびResistive Indexとの相関についての検討

鹿児島大学泌尿器科
速見　浩士，宮元　一隆，杤木　太郎，山田　保俊，中川　昌之



【目的】血清Cr値、年齢、性別を用いる推算糸球体濾過量(eGFR)と畜尿法によるクレアチニンクリアランス値(CCr)およびカラードプラーエコーによるResistive Index(RI)を比較し、その相関性を検討すること。
【対象と方法】24時間の畜尿によりCCrを測定した入院患者185名(男性138例、女性47例、年齢中央値71歳)を対象とした。eGFRはCKDガイドラインに基づき$194\times Cr^{-1.094}\times$年齢$^{-0.287}$(女性：×0.739)の計算式で算出した。RIは両側腎の葉間動脈を3か所ずつ測定し平均値を求めた。
【結果】eGFRとCCrの回帰分析の結果、相関係数0.84、回帰分析方程式$y=0.693x+6.841$、$p<0.001$と有意な正の相関が認められた。また、eGFRとRIの回帰分析の結果、相関係数-0.31、回帰分析方程式$y=-23.17x+62.75$、$p<0.001$と有意な負の相関が認められた。
【結論】eGFRはCCrと相関し、簡易な総腎機能の評価として信頼できると考えられた。